

『批判的实在論 (critical realism)』の哲学的特徴とその意義

2016, 10, 23 佐藤春吉 (立命館大学)

hst01932@ss.ritsumeai.ac.jp

はじめに

「批判的实在論 (critical realism)」(略称 CR) は、イギリスの哲学者、R. バスカー (1944-2014) が提唱し、英語圏を中心に北欧圏や欧米諸国の社会科学、人間科学分野の研究者たちの間に影響力を広げてきている哲学理論である。CR は、「超越論的实在論 (transcendental realism)」と「批判的自然主義 (critical naturalism)」を新たな哲学および社会科学・人間科学の基礎として提示している。それは、もともと科学哲学から出発している。CR は、研究者ならば研究過程で必ず逢着する存在論や認識論といった哲学的な諸問題にたいして明確な見解を提示し、具体的研究やその方法論の開拓に指針を与えることを目指しており、それは、社会学、経済学、政治学、社会福祉や教育学、ジェンダー論、メディア論、環境論など、多彩な研究領域で応用されてきており、学際的な研究を刺激している。

CR は、ヒューム主義的な経験主義に依拠したこれまでの法則観を根本的に批判し、自然必然性の实在論的な理解を進め、それを起点にさまざまな哲学的議論を展開している。したがって、その理論的基礎は、いわゆる「科学的实在論」の議論内容との結びつきが非常に強く、今日の「科学的实在論」の議論とのつながりは明確である。ちなみに科学哲学の分野でも、最近は、「科学的实在論」が隆盛になっているようである (例えば、戸田山和久『科学的实在論を擁護する』名古屋哲学出版会 2015、参照)。

しかし、「科学的实在論」は基本的に自然科学をその議論の対象にしているのに対して、CR は積極的に社会科学や人間科学のメタ理論的問題に踏み込み、それらの諸科学の方法論的な問題に方向を指示し示唆を与えるものとなっている。それはまた、科学論の領域をも超えるより広い哲学的な諸問題にもその射程を広げ、実践的な諸問題や倫理的な問題にも積極的な理論展開をはかっている。そのため、その問題設定や理論構築の仕方には科学論の枠を超えた独自のものがあり、用語法などもオリジナルで、多くの複雑でユニークな用語展開がなされている。ちなみに、バスカーの用語開拓の感性や能力は、驚嘆に値するものがある。それらの用語はあまりに独創的で錯綜しているために、辞書も作成されているほどである (cf. Marvyn Hartwig ed., *Dictionary of Critical Realism*, Routledge, 2007)。

CR グループに集まっている多彩な研究者たちの共同研究を支えて、今もその共同綱領となっているのは、バスカーの初期の主要著作、『科学と实在論』(式部信訳、法政大学出版局 2009、原著 1975)、『自然主義の可能性』(式部信訳、晃洋書房 2006、原著 1979) を中心とするバスカーが比較的初期に展開した理論である。これは、バスカーによって basic critical realism と命名され、バスカー自身もその後も継続的に支持し改良につとめていた。バスカーは、その後、『弁証法』において、非实在論の諸哲学を総括的に批判し、absence 概念を中心に運動と変化を扱う哲学を提示し、さらに倫理的な問題にまで射程を延ばす議論を展開している (『弁証法：自由の脈動』式部信訳、作品社 2015、原著 1993)。『弁証法』は、マルクスを参照点にしてヘーゲルの弁証法をかなり精緻に内在的に批判したものである。同書はしかし、単なるヘーゲル批判の書ではなく、パルメニデスやプラトン以来、近代西欧哲学に通底する哲学的な問題構成における誤りを明らかにして、独自の解決を示そうとした研究であり、それまでの基礎的な CR の理論の枠を大きく超える展開がなされている。その議論は非常に入り組んでいて難解であり、この学派の内部においてもさまざまな議論を呼び起こしている。報告者は、『弁証法』の複雑で錯綜した議論のすべてについての正確な理解ができているとは言えない。また、いくつかの議論については保留したい

部分もあるが、真剣に受け止め学びとるべき貴重な哲学的思考が豊富に見いだせると考えている。本報告では、『弁証法』で展開されているいくつかの論点も加味している。

バスカーは『弁証法』以後、さらに新たな思想展開をはかり、いわゆる meta reality 論など、spiritual turn といわれる方向に向かった。バスカーによれば、彼の弁証法も meta reality 論も当初のCRの議論の内的可能性の必然的な発展であり、全体として整合的組み立てとなっているとされている。バスカーの中期、後期の理論展開には、このグループの研究者のなかにもさまざまな程度で賛否が分かれている。ただ、バスカー自身は、その後も初期の基礎的なCRにかかわる問題群についても多くの著書や論文を書いているが、その主張内容は当初の理論を補足補強することはあっても、重要論点についての修正は全くなされておらず、共同綱領そのものは揺らいではない。その点では、大きな発展的な展開を経験してきたにもかかわらず、彼の初期の哲学的主張は一貫した内容を保っていて古くなってはいない。なお、meta reality 論については、報告者は理解不十分であり、まったく触れることができない。

バスカーが『科学と実在論』を公にして批判的実在論を提唱したのは、1975年であり、すでに40年が経過している。バスカーも参照しているマリオ・ブング（Mario Bunge）などの科学的実在論の展開はもっと早い時期（50年代初め）にさかのぼる。こうした実在論哲学の潮流について、その源流をK. マルクスのドイツ観念論批判に求めても、あながち不当ではないと思われる。ブングもバスカーもマルクスの観念論批判と唯物論（実在論）から学んでおり、その思想の継承者として自己を位置づけている。もっとも、ドイツ哲学の伝統のなかでは、ハイデッガーの同時代人のN. ハルトマンが、1920年代にすでに、認識現象のアポリアの現象学的分析を起点にした批判的存在論（実在論）を展開していたことも指摘しておきたい。ハルトマンの実在論は、認識論中心主義から完全に抜け出しており、階層論や創発性の議論など、CRと重なる議論が多いことも特筆して良からう。近年（90年代末以降）の「思弁的実在論」や「新実在論」の展開の背景には、ポストモダン哲学における行き詰まりの自覚が発端となっているようである（これら実在論の新潮流を‘post postmodern realism’と自己規定する議論もある。cf. Afterword by Sarah De Sanctis and Vincenzo Santarcangelo, in Mourozio Ferraris, *Introduction to new realism*, Bloomsbury 2005）。その潮流には、非常に多様な主張があり、そのバックグラウンドもさまざまなようである。

残念なことに、「思弁的実在論」や、「新実在論」や「対象志向的存在論」などの興味深いこれらの新潮流のなかで、「認識論から存在論への転換」や「実在論」あるいは「唯物論」の主張がなされながら、そうした方向をいち早く切り開いてきたCRやバスカーへの言及や参照がほとんど全くなされていないのは、いぶかしくも寂しい感じがする（管見であるが、マヌエル・デランダはバスカーやアーチャーに言及している）。バスカーの方では、思弁的実在論などの動向についていくらかの言及がある。バスカーからすると、その問題意識において共有可能な部分があり期待している面もあるが、その「実在論」の主張については不徹底な部分がある、として批判的である。例えば、カンタン・メイヤスーによる「相関主義 correlationism」批判と、認識論から存在論への展開をはかるべきとするその主張は、CRの主張とその限りでは完全に一致しているが、相関主義から抜け出すための道がどこにあるのかについては、CRとは全く異なっており、バスカーからするとその議論はいまだ相関主義から抜け出していない「不完全なもの」と見なされている。特に思弁的実在論の潮流が、実在論を唱えながらも、主として物 thing の存在に関心をよせ、肝心の因果性の問題に関心を持っていないことを批判している。バデューの数学的実在論についても厳しい批判的コメントがなされている（cf. Roy Bhaskar (ed. Mervyn Hartwig), *Enlightened Common Sense: The Philosophy of Critical Realism*, Routledge 2016, p.38-9. p.193-4, p.201-2）。本分科会では、まぜか交わらないままである「実在論」の両潮流のそれぞれの特徴について明らかにし、細部の議論ではなくできるだけ大きな観点から比較

検討するような意見交流ができたらと思っている。日本だから、あるいは唯研だからできる、双方の主張の比較検討および交流の機会として非常に貴重なものになるのではないかと思われる。

以下は、実りある議論に資することを期待して、双方の哲学的な主張が比較可能な接点となりうる論点を多少意識して、CRの特徴について報告する。私の知識の範囲で、まずはCRの議論の主要な特徴点を紹介することにする。双方の理論の哲学的な見解の相違や議論可能な地平がどこにあるかなどの論点が浮かび上がれば幸いである。

(※以下は、主としてバスキアの晩年の遺稿集、前掲の R. Bhaskar, *Enlightened Common Sense* での論述を参考にしている。本書は、これまでとは違った角度から自らのCRの哲学を整理しながら、晩年までの思想発展も踏まえて体系的に比較的平易に語っている。)

1. 批判的実在論の「哲学」への姿勢の特徴点

①Underlabouring (下働き)

哲学の果たすべき仕事は、科学の実践ならびに人々の社会的実践のための「下働き役」である。「下働き」の標語は、CRが、哲学が行うべきこと、CR自身が行っていることについて一言で言い表すものとして、このグループではよく語られている。

バスキアはこの哲学観はJ. ロックに由来するとしている。哲学は、科学が逢着する哲学的な難問や科学の実践を誤らせるさまざまな哲学的な言説を批判的に解明し、その問題の解決を示すことで、いわばその道を掃除して、科学的認識の促進に貢献するものである。「下働き」は科学の営みの道ならしに限定されない。広くは、人間社会における人々の実践、社会生活の改良や人々の well-being につながる実践を促進するための、哲学的な問題解明による道ならしの役割を果たすのである。

②Seriousness (誠実性、まじめさ)

この用語自体はヘーゲルからとっているとされている。哲学は、その主張と行動が一致していなければならない。言行一致原則、一般化して言えば、理論と実践の一致(統一)の原則である。バスキアは、哲学がしばしば現実世界における行動や実践の問題から切り離される傾向があることを哲学の欠陥と考えている。哲学的な言説は、しばしば言行不一致を内包している。バスキアは、自らがその主張に従って行動しない、または実行不能のことがらを、哲学的な言説として主張するという不誠実が行われている事実を批判する。主観的観念論などはその典型である。バスキアの言う誠実性の原則は、なにかファナティックな意味で思想に忠実に行動しろという意味ではなく、むしろ実行不可能な不合理が帰結するような無責任な哲学説への批判である。哲学的言説の真価は言説自体の巧みさや高尚さによってではなく、その言説が現実の实在世界の内部でどのような実践と結びつくのかという観点から、評価されるべきなのである。この考え方は、バスキアの実在論をささえる重要な考え方で、そのような真理観を「alethic truth」として体系的に展開している。不誠実は、近代哲学がかかえる深刻な矛盾であり、CRは哲学のあり方についての根源的な問題点を指摘しているのである。この考え方は、バスキアが多用する「理論／実践矛盾」とか「TINA妥協」とか「denegation」といった独特の批判的な概念につながるものであり、哲学のあり方を問うものである。

③内在的批判

「内在的批判」はCRの哲学的批判の方法の基本である。ある哲学の批判は、その哲学の理論の内部のまたはそれが前提にしているものとの、あるいは現実世界との関連についての首尾一貫性を問うことからなされる。ここでも、バスキアは、理論内部の論理的首尾一貫性だけを問題にしているのではなく、その理論的主張と関連する実践とのあいだの関係における整合性・首尾一貫性をも問題にしている。

④世界の同一性

哲学が対象とする世界と科学が対象とする世界、人々が日常生活を営む世界は基本的に同じものである。CRは、哲学と科学を分離しない。どれも同じ世界を問題にしておき、哲学が科学の営みの下働き役を果たせるのは、また、人々の生活する世界において逢着する哲学的問題についての解明で、社会問題の解決や良き生活の実現のため下働きができるのは、扱っている世界が基本的に同じだからである。哲学が科学の扱う世界とは別の特別の世界を扱っているということはありません。もちろん、哲学は科学と同じことをするのではないし、人々の日常生活の日常的実践知と同じ問題を考えるのではない。哲学は同じ科学の対象や人々が生きる世界と同じ世界の問題を扱うが、それが取り組むべきふさわしい問題の解明に取り組むのである。

⑤私たちの実践における暗黙の諸前提の解明としての哲学

では、哲学はこの同じ世界におけるどのような問題にとりくむのであろうか？それは、この世界におけるさまざまな諸実践における最も抽象的で一般的な問題や世界の諸特徴、通常は自覚されず論じられないまま暗黙裏の諸前提について解明する。世界とそこでの人々の実践にかかわるこうした一般的な諸問題や一般的な諸特徴は、哲学的なカテゴリーで表現されている。こうしたカテゴリーは、部分的特殊的には科学でも議論されるが、より一般的な問題としては哲学が扱う。世界の実在的で一般的な特徴は哲学的な諸カテゴリーで捉えられるので、CRの哲学は「カテゴリー的実在論 *ca tegoria lea lism*」(cf. p. 3 あるいは報告者の理解では「実在論的カテゴリー論」とでもいうべきか) という形をとる。特にCRは、経験を超える目に見えない実在的な因果性をとらえることがその哲学の出発点ともなっている。こうした因果性などのカテゴリーは超越論的な推論、「リトロダクション」によって解明される。現象の背後にある、それらの現象を生み出す真の原因を探る問いは、科学が知解可能であるためには世界はどのようになっているのかという問いである。CRの哲学では、実在世界が私たちの経験を超えているのであり、カテゴリーは経験的な概念化を超えたレベルで理解する必要があると主張する。

⑥反省性の高度化と実践の変革

CRは、これまでの非実在論の哲学が、この実在世界とそこでの人間の諸実践の前提条件を誤って記述してきたことを批判する。そのような哲学的な認識構成はパスカーによって'*TINA compromised formation*'('TINA 妥協形成物'?) と呼ばれる(『弁証法』で主題化された)。この概念は、パスカーが非実在論的な近代哲学の根本問題の特徴付けるために編み出した用語で、複雑なゆがんだ論理を持つ心理的な妥協の、哲学に表出する意識および理論形態を、表現している。それは、さしあたりは理論/実践首尾一貫性の欠如を指す。理論で否定していながら否定している当のものを実践上は前提してしまっていて、そのことを自覚しない、または否認する(パスカーはこのことを *denega tion* という言葉で巧みに表現している) ような、意識や哲学的理論構造である。実践的には正しいことをしているがその実践の前提となる理論が誤っているとも言える。これはつまり、「誠実性」を喪失している形態である。パスカーは、非実在論哲学は総じてこのような自己矛盾を内包しているとみている。CRは、哲学のこのような不誠実な意識形態を明らかにし、当事者にその自覚をもたらすように導く批判を遂行する。この分析による批判的解明をパスカーは反省性の高度化としてとらえている。これによって実在的で現実的な問題に立ち向かう実践的態度を形成する、つまり実践の変革にも寄与することが可能になる。こうしてCRは、「啓蒙されたコンセンス *enlightened common sense*」の促進を目指しているのである。

2. 超越論的実在論(*transcendental realism*): 科学の哲学

①認識論と存在論

- ・認識論；認識について、その内容、形式、方法、資格や認識活動の性質などについての哲学的な議論
- ・存在論；意識から独立した実在的対象の性質や特徴やあり方についての哲学的な議論
- ・存在論は近代哲学の主流では一種の独断論とみなされ、長い間タブーとなってきた。

②認識論的誤謬、主観／客観同一説の誤謬

CRは、認識論優位から存在論優位への哲学の転換がなされるべきだと主張する。

CRは、経験主義的な科学論の限界についての批判から存在論的問題構成の必要性を主張する。経験主義の根本的な誤謬は、科学の対象が私たちの主観によって経験される諸現象だけに限定されおり、自然必然性や法則の普遍性はたんにたまたま経験される根拠不明な恒常的な連結関係（constant conjunction）としてしかとらえることができない。ヒュームの法則理解の根底には、世界が私たちの主観においてとらえられる原子論的にばらばらに断片化された経験の集合とされ、見いだされる法則は偶然的な現象のなかの習慣的事実に解体されている。ここでは、世界は主観の内部で経験されているものとしか語ることができない。存在論的な思考の可能性は閉じられ、科学の対象は認識論的な問題構成の中でしか論じられない。このような問題構成、存在についての議論が存在についての認識についての議論にすりかえられることを、バスカーは認識論的誤謬（epistemic fallacy）と呼んで、徹底的に批判する。この場合、存在は主観の内部の経験に還元されるので、主観と客観は同じものになる。実はこの主観・客観同一説は認識自体の成立を実際には理解不能にしている。認識とは、認識主観と対象が存在論的に区別されることによって始めて成立する。主客同一の構図からは認識の誤りも、その根拠の認識も、その改良も、不可能である。バスカーは、この認識における主観と客観的对象の存在論的な区別の構造を、実在論の基本特徴とみなし、存在論的な「指示的脱離（referential detachment）」と呼んでいる。この referential detachment は超越論的実在論の論証のもう一つの道筋ともみなされている。

③コペルニクス的転回の意味 人間中心主義の脱却としての実在論

バスカーの「認識論的誤謬」という主観内在主義の構図は、実はメイヤサーのいう近代哲学を拘束している「相関主義」の構図と同じものである。バスカーはメイヤサーよりもずっと前に、この構図はデカルト、ヒューム、カントに由来することにも論じ及んでいた。また彼は、カントが現象世界のすべてを認識主観によって構成されたものと見なす自らの超越論的観念論の哲学を、形而上学の独断のまどろみから抜け出す「コペルニクス的転回」をはたすものとした点を批判している。コペルニクスの地動説は、人間の住む地球を宇宙のなかの一つとみなし、天動説のような地球中心主義（「人間中心主義」）の見方をひっくり返したものであるのに対して、カントは人間の主観を世界の中心に据え直したものでコペルニクス的転回どころかその逆であり、真のコペルニクス的転回はカント的な観念論を脱して実在論に踏み出すことである。CRの哲学こそそれを成し遂げていると、バスカーは主張していた。また彼は、認識論的誤謬をかかえる観念論を「人間中心主義」の誤謬と規定し、自らの実在論をこのような意味から「非人間主義」と規定し、人間主義または人間中心主義の哲学からの脱却の必要性を唱えていた。この主張も近年のメイヤサー主張と瓜二つであるが、バスカーはすでに40年もまえにその主張を行っていたのである。ちなみに、バスカーの言う「非人間主義」は、倫理上の「ヒューマニズム」の否定を意味しているものではなく、CRはこの意味での「ヒューマニズム」の擁護者である。

④ヒュームの経験主義哲学が想定する「必然性」の成立条件は根本的誤り

ヒューム的な経験的な観察にもとづいて普遍的自然法則、自然必然性を根拠づけるためには、帰納法の限界を超えられない。帰納問題をクリアするための苦肉の想定が「自然の斉一性」の想定である。これは、実はひそかな「存在論」の密輸入である。つまり、これは、世界は無構造であり、無変化であり、無層的であり、同一事象の無限の

繰り返しの世界であると存在論的な想定をしているのである。これは実在世界についての甚だしく誤った理解である。哲学は、世界の構造的性、階層性、変化性、潜在的可能性、実践的変革可能性を説明できなくてはならない。実在論こそそれらを説明できるのである。

⑤「経験主義的存在論」

哲学的な知は、認識論のみでは成立しない。いかなる知識論も知識の対象についてのある存在論的な想定を前提に持っている。カントも、経験主義哲学も暗黙の存在論を前提している。経験主義的存在論は、世界は人間が経験するものとしてのみ存在するという存在論＝「経験主義的存在論」を主張していることになる。この立場はまた、密かに無階層、無変化の存在論の想定を含んでいる。存在論を抹消することはできないのである。

⑥カントの超越論的問いの応用、実験の哲学的分析による実在論の導出

自然必然性や普遍的な自然法則の正しい認識のためには存在論的な実在論的な把握が不可欠である。そのためには経験主義的存在論の閉塞的な枠組みを超える必要がある。

ここで、バスカーは、カント哲学の主観内在主義を批判しつつも、カントの超越論的な論証の手法についてはこれを生かそうとする。「CRは、反カント主義の目的を実現するためにカントの手法、特にその超越論的論証の手法を採用する」(ibid, p.25)。バスカーによれば、このような超越論的論証では、「人間の諸活動がこのような形で可能になるためには、世界はどのようなものでなければならないか？」と問うことから始める。バスカーによれば、カントの場合の超越論的問いも、我々の認識の客観性の成立のための前提条件、根拠を問うものであり、そうした認識が成立していることは前提となっていた。カントは、結局、その根拠を認識主観のアプリオリな形式に求めた(超越論的観念論)。しかし、そうする必然性はなく、同様の超越論的な問いから超越論的な実在論の方に進む道があったのである。

自然必然性についての科学的認識活動が問題になっているここでは、この問いは科学的実践の可能条件としての世界のありようについての問いになる。

自然必然性の認識のために科学は何をしているのか？実験科学の分析がそれを明らかにする。開放システムである自然において生起する諸事象を観測しているだけでは、自然必然性は見いだせない。実験は開放システムに対して、科学者が特定現象の原因となる生成メカニズムについての仮説をもって人為的に介入して、ある閉鎖システムを作り出し、仮説的に想定された生成メカニズムの発現をもたらす、これを観測している。実験は、閉鎖環境を作り出すための、世界に介入する科学者の実践的な行為である。実験の分析から、科学は実践的な行為であること、科学の目的は生成メカニズムの発見にあること、生成メカニズムは受動的な経験される領域にではなくより深い存在次元にある実在であること、世界は深さをもって層化されていること、などが明らかになる。

⑦open system (開放システム) と closed system (閉鎖システム)

世界は開放システムである。多数の因果連関が相互に干渉しあい複合する複雑な状況が我々の実在世界である。必然的連関と偶然的連関が錯綜する重層的多元的因果連関の世界という見方に立つ必要がある。経験主義は、世界をあたかも閉鎖システムであるかのように思考している(自然の斉一性)が、それは自然の実相ではない。constant conjunction が自然界で観測されるのは、天文学の対象など、非常に特殊な相対的な近似的閉鎖システムが偶然存立している場合だけである。

⑧retroduction: 生成メカニズムの発見のための推論

CRは科学的認識において遂行される推論について、deduction 演繹, induction 帰納, abduction, と retroduction という4種の推論をあげ、それぞれの役割と限界について論じている。科学においては、前2者も重要であるが、推論がそれら2者にのみ

限定されてきたことが帰納問題を解決できなかった要因であり、経験主義を超えられなかった要因である。見逃されてきた後 2 者の推論こそが科学的発見において重要である。特にバスターは retroduction こそ、現象から実在的本質、構造、生成メカニズムを推論する仮説構成的推論（経験を超える超越論的推論）であり、これこそ、科学的推論の最も重要なものであると主張する。リトロダクションは、批判的実在論の科学的発見の論理の中軸をなす。また、それは、哲学の世界への向き合い方についての、基本姿勢を表現する重要な概念である。

⑨ 深さの存在論 (depth ontology) ; empirical, actual, real domain : 三層の domain

世界は観察される経験的事象だけで存在しているのではない。観察されなくても生起している出来事が存在する。現に生起していなくても生起させるメカニズムが存在する。生成メカニズムは、たとえ現に働いていなくても傾向性として潜在力として存在している。メカニズムとは、超事實的 (transfactual) に実在する normic な作用力である。この生成メカニズムの存在こそ自然必然性をもたらす当のものである。このように、我々の世界は、経験のドメイン、出来事のアクチュアルなドメイン、生成メカニズムのリアルなドメインの三層からなっているのである。これらは相互に混同されてはならない。この考え方から、経験されるものだけが存在すると見なす経験主義的実在論が批判される。また、生起する出来事のみが存在すると考える「actualism」も批判される。世界は、経験される世界、出来事からなる世界、出来事としては発現していなくても潜在する作用力つまり傾向性として超経験的に実在する生成メカニズムの世界へと順次より深い次元をもって存在している。科学は、最終的には存在論的な探究を通して最深部のメカニズムの認識に至る。世界は階層的にできているのである。

⑩ 実在の対象 (intransitiveなもの) と認識 (transitiveなもの)

認識は人間の意識的な実践活動であるが、認識の対象は、あくまで人間の意識や認識活動から独立した自存的 (intransitive) な存在である。これに対して、われわれの認識活動およびその生産手段であり生産物でもある「概念」は、意識に媒介された存在 = 意存的 (transitive) なものである。この両者は厳密に区別されるべきで混同されてはならない。意識的活動に媒介され意味を帯びて構成されている社会を対象にする社会科学でも、その対象の自存性は揺るがない。

⑪ 世界の創発的階層性

創発とは、その内部の諸要素のある特殊な結合すなわち構造の成立によって、諸要素にはなかった新しい性質をもったものが生じることである。世界は、こうした創発的に形成された構造の複雑な多元的階層を形成している。バスターはこれを、laminated systems と呼び、いくつもの種類について論じている。社会は諸個人から、諸個人は生物学的・心理学的構造から創発する。心は物質的な身体の構造から創発する。バスターは心の創発と、心が独自の因果的な能力を持つことを認め、心についての「共時創発的な力の唯物論」の考え方を提起している。なお、創発は無限ともいえる階層的連関をもち、分子は原子から、原子は粒子から、いずれも構造的に創発する。世界は複雑で多様な階層的な諸構造によって成り立っている。

⑫ 生産実践としての認識活動

認識主体は受動的観察者ではなく、世界に積極的に介入して知を探索する。認識は実践であり、認識者は積極的な行為主体 (agent) である。認識はしたがって知識の生産実践である。認識実践は社会的な活動であり、知の生産過程は社会的なものである。諸概念は認識のための用具、生産手段である。概念は、対象の適合的な認識のために常に加工、改良、転換可能なものである。したがって、人間の認識は完成されず、不完全で可謬的なものであり、批判に開かれている。

⑬ 「実在論的存在論」と「認識論的相対主義」および「判断的合理主義」の結合

(批判的実在論における「聖三位一体 (holy trinity of critical realism)」)

認識は、先行する理論や概念の加工によって対象の認識に接近する概念加工の認識生産実践であり、社会的なものである。したがって、人間の認識活動は、生物学的な制約とともに、歴史的社会的技術的制約のもとにあり、常に可謬的であり、修正と改良の可能性を持ち、相対的である。この意味で、CRは「認識論的相対主義」を承認する。ここでいう認識論的相対主義は、対象に対する認識の客観性、適合性をすべて否定する「認知的相対主義 cognitive relativism」のことではない。CRの「認識論的相対主義 epistemological relativism」は、対象の自存性を承認する「存在論的実在論 ontological realism」と結合されるべきである。認識論的相対主義を承認しても、対象の存在論的な自存性を前提にするならば、認識と対象との適合性は問える。この適合性についての実践的なテストは可能である。たとえ直接的ではなく理論媒介的なものであっても、人間は実験を含むさまざまな実践的なテストを介して、適合性の度合いについては合理的な判断が可能である(「判断的合理主義 judgmental rationalism」)。この点で、認識の適合性について何らの合理的な判断もできないとする立場(「判断的非合理主義」または「判断的相対主義」)は斥けられる。科学は、対抗する理論相互の実践的なテストを介する比較によって、より適合度の高い、より説明力のある理論を選択することができる。その意味でCRの主張する「認識論的相対主義」は、歴史的な知識の発展の可能性を積極的に許容し、説明するものである。バスカーは、この三つの考え方の組み合わせは、さまざまな非実在論的な相対主義を批判的に乗り越えるうえで不可欠なものとして重視し、「批判的実在論の聖三位一体 holy trinity」と称している。

⑩ 実在性の因果性基準と主観的なものの存在論的実在性の承認

何かが実在するかどうかは、知覚や経験も実践的なテストを必要とするとしても判断基準の一つとはなりうる。しかし、知覚できないが実在するものが重要である。生成メカニズムなどは通常そのままでは現象せず知覚できないことが多い。また、重力場や量子などは直接知覚できないが実在する。さらに、社会制度や社会システムなどもそれ自体は知覚できないが実在する。では、事物が実在するとはどういうことか、それはそのものがなんらかの因果的効果を及ぼす力能を持っているということである(実在性の因果性規準)。

またこの考え方から、人々が懐く観念的なもの、信念も実在するといえる。

「信念、間違った信念も矛盾した信念も、たとえ幻想でさえも、すべてが、少なくともそれらが因果的効果を及ぼすかぎり、実在的であるとみなされなければならない。」

(ibid.p.125)

3. 「批判的自然主義 (critical naturalism)」: CRの社会存在論と社会科学の哲学

① 「批判的自然主義」としての社会科学の哲学

社会科学(人間科学を含む)にたいして、自然科学の方法がそのまま適応可能かどうかをめぐる二元的な対立がある。自然科学の方法がそのまま適用可能と見なす立場は自然主義と呼ばれ、主として経験主義に代表される。これに対して、社会科学は自然科学とは異なる方法を用いる全く異なる科学であるという立場が対立してきた。この反自然主義の立場を代表するのは解釈学である。CRは、社会科学も科学的認識の基本構造は自然科学と同様であるとして、反自然主義の立場はとらない。自然科学の哲学的分析から形成された超越論的実在論の基本的な考え方は、社会科学にも通用するからである。しかし、では超越論的実在論の議論をそのまま社会科学に適用すれば済むのかといえそうではない。社会は独自の存在構造をもっており、その存在論的な独自性に即した社会哲学、社会存在論の新しい発展が必要である。この意味で、CRの社会科学の哲学は「批判的自然主義」と呼ばれている。一方で、CRは、社会存

在の独自性として社会関係が解釈学的過程を含むことを承認している。したがって、後には、「批判的自然主義」＝「批判的解釈学 critical hermeneutics」というような表現もしている。(cf. ibid. p.45)

②様々な二元論とその克服としての批判的自然主義

CR は、上記のように自然主義対反自然主義の対立を克服する理論の開発から出発している。社会科学および人間科学分野では、この他にも多くのこれまでに解決困難と見なされてきた二元論的な対立が存在している。CR は、批判的自然主義によって、これらの多くの二元論的対立の克服が可能になると主張している。

二元論的対立とは、社会／個人、構造／エージェンシー、肉体／精神、事実／価値、理論／実践 etc.の対立である。方法論的集合主義と方法論的個人主義の二元的対立は、社会が諸個人の織りなす社会関係とその物質的基礎とから創発して実在するものとみなすことによって解決される。諸個人は、身体と精神能力をもったエージェントとして独自の存在として創発し、実在している。CR は、人間エージェントの実在的因果的力と社会構造の独自の因果的力の双方を承認し、相互の動的な実在的な連関をとらえる。また、CR では、人間エージェントの意識的意味的行為における因果的能力を承認し、人間社会の意識的に媒介された社会関係における実在的連関をとらえる。解釈学的関係は実在的で物質的な社会関係のなかに埋め込まれており、社会存在に内在する。このようなかたちで、CR では、さまざまな人間的対立が、創発的階層論と深さの存在論の立場から、その解決が見いだされている。

③社会存在の独自性と自然主義の限界

社会的存在は、自然存在とは異なる。したがって、「自然主義」は批判的に限界づけられる必要がある(批判的自然主義)。科学はその対象の実在論的な性質によって独自の方法を開拓すべきである。社会存在の独自の性質を無視して社会科学に対して自然科学の方法をそのまま適用することはできない。この意味で、自然主義の限界を示している社会存在の性質については、以下のように整理されている。

●存在論的に独自の性格による自然主義の限界

- (i) 社会存在の活動依存性；社会は、人間の活動・行為によって成り立っている。社会は人間の自己創作物である。人間は、意図的に社会構造を変革する活動を行うことができる。これに対して、自然は人間の創作物ではない。自然科学の対象は、人間がその内部の存在ではない。これに対して、社会科学では、社会構造とエージェンシーの間の特有な実在的弁証法的な関係が主題になる。
 - (ii) 社会存在の概念依存性；社会関係は、意図的意味的な理由を持った行為者たちの相互行為連関によって成り立っている。社会関係は概念に媒介されて存立しており、すでに行為者たちによって意味をあたえられ解釈された現実として成立している。「二重の解釈学」の必要。
 - (iii) 時間空間依存性(地史性)；社会は、agents の活動によって、また地理的要因や物質的諸要因や外部環境の変化によって常に歴史的に変化する。したがって、社会的なカテゴリーはその妥当範囲について歴史的空間的規定性を本質的なものとして持っている。通常自然科学(複雑系科学が重視する宇宙、生命、地理などの進化論的研究を除くとすれば)／バスターはこの自然進化論の論点も無視していない)の対象についてはこうした限界を考慮しない。
- 認識論的限界；社会構造は直接の観察によって見出すことはできない。したがって、思考力を駆使した抽象によってとらえるほかない。この点は、自然科学も共通する面があるが、社会科学では実験が困難であることによって、この制約がとくに重大なものとなる。社会存在は、その複雑性の度合いだけでなく、意識的で身体的な行為能力を有する人間エージェントの能動的変革能力、批判性、反省性によって、閉鎖はほぼ不可能性である。つまり、社会では、人為的な closed system がつくりえない。社会科

学は、開放システムのなかでの多元的で動的な多重の諸要素の複合、コンステレーションの関係を、観察と概念的抽象力によって把握する作業となる。

- **関係的境界**；社会では、認識主体が社会内部に位置し、自己自身が認識対象に含まれる。人間の抱く観念の因果的効果の存在によって、人間の認識や理論や信念、科学などは人々の社会实践に影響を与え、構造の変化や構成に因果的な効果を発揮する。社会構造と人々の観念は相互に影響しあう。通常、自然対象と認識主体はこのような関係を結ばない。
- **社会存在におけるイデオロギーの内在性**；イデオロギーは、虚偽の誤った社会認識によって、問題ある社会構造・社会関係を正当化する。イデオロギーと社会構造は存在論的に連関している。CRでは、社会科学は社会認識における真理の解明に寄与し、このようなイデオロギーの虚偽を暴くことになる。これは、バスキアの「説明的批判」の概念に関連する。こうした認識対象たる社会の内部で、存在と意識の転倒やねじれ現象（論理／実践矛盾）が生じることは、社会存在に特有のものである。＝社会科学は本来的にこうした矛盾を解明する批判的な実践的な科学である。
- ④ **理由の因果性（志向的因果性）と心の創発**；人間の抱く理由、動機（志向性）は、それ自体が因果的効果を発揮し、身体をもち因果世界に介入する人間の行為の原因となる。CRでは、人間の主体の因果能力を積極的に承認する。この能力によって社会構造を構成する人間実践が可能になる。バスキアは、志向的動機を持った行為する人間エージェントの性質に関連して、身体性から創発する実在的因果力を有する心の創発についても論じている。その考え方は、還元主義的な物理主義的な「心の唯物論」に対立させて、「共時創発的な力の唯物論 synchronic emergent powers materialism」と定式化されている。
- ⑤ **多重の多元的因果連関、多元決定**；一般に開放システムでは、多元的・多重的な因果連関が交錯する。社会は、開放度が高く、多元的な決定が通例であり、エージェントの創発性も絡んで、偶然性の要素が高い。CRは、一般に、世界観としての決定論を拒否し、世界における人間の自由の余地を存在論的に承認する。これは、自然必然性の存在や相対的に安定した秩序の創発を否定するものではない。それどころか、それらは人間の志向的実践行為、変革実践、総じて自由のための前提条件でもある。

⑥ **説明的批判（explanatory critique）**

社会的諸関係の内部においては、特有の虚偽意識（イデオロギー）と現実の社会的実践的諸関係が転倒した複合的な連関をもって相互に支えあって存在しているような事態が頻繁に生じる。特に資本主義的な社会においては常態である。社会科学は、客観的な事実の説明を目指す、もともと概念に媒介された社会存在の研究においては、概念と社会的実践の間の実在的な関係を解明し、社会意識のこうした自己解釈の歪みや虚偽性を暴き、そのような現象の生成メカニズムを解明し、全体的な連関の中で説明する必要がある。社会科学の説明は、このようにして本質的に批判を含む「説明的批判」となる。説明的批判は、社会における虚偽を含んだ自己説明と現実の実践関係が矛盾している（「理論／実践矛盾」）場合、この矛盾を解明し説明し批判しなければならない。

バスキアは、この「説明的批判」の構想を、マルクスから得ている。マルクスの『資本論：経済学批判』では、実在的経済関係、国民経済学のイデオロギー的経済的諸カテゴリー、そしてそれらに規定された日常的経済実践、現実には生起する経済的諸現象の4つが内的に関連しあって、誤った物象化的な、あるいは現象固定的なイデオロギーを再生産していることが暴かれている。この批判は、日常実践における虚偽意識を批判し、それを「科学的認識」としてカテゴリー上で再生産しているブルジョア経済学を批判し、そうしたカテゴリーを現実化させている資本主義的諸関係を批判的に暴き出し、さらにその現象の生成メカニズム（資本主義的経済構造）を批判的に分析し、

全体的な構造的因果連関において説明する。ここでは、事実の分析と説明が、その批判を内包している。マルクスでは、事実の批判的説明的研究と対象についての価値的批判とがみごとに結合されている。こうして、バスターによれば、問題発生メカニズムを解明した説明的批判は、問題の克服を命じる実践的要請を内包している。説明的批判の合理的な成立可能性は、事実認識と価値判断の峻別に対する反論となっている。バスターは事実認識から価値判断への移行は承認する、がその逆は批判している（『弁証法』以前は双方向の移行を承認していたが、修正している）。

この説明的批判の論理は、『弁証法』では、解放的倫理学を基礎づける議論に発展せられ、さらに大掛かりな議論として展開されているが、ここでは深入りしない。

⑦社会科学における研究実践における批判的方法論的多元主義の提唱

CRは独自の方法論を提案するというよりも、既存の方法を対象の存在論的性質と研究目的とに適合したかたちで自由に組み合わせ、批判的に使用してよいと考える。ただし、無原則な折衷ではなく、研究対象の存在論的実在的な性質についての反省的理解をもとに特定の方法の特性と限界を見極めながら、各種の方法を組み合わせる研究を進めることになる。

⑧ TMSA (社会的行為の形態転換モデル: Transformational Model of Social Action)

バスターが一貫して提唱している社会構造と人間実践の相互関係に関する理論モデル。

『自然主義の可能性』では、TMSAは人間のエージェンシーと社会構造が相互に制約しあい、人間の実践的行為によって相互が再生産され、形態転換されていく関係を一般的に定式化するかたちで論じられていた。それは、ギデンズの影響もうかがえるモデルであった。しかし、アーチャーによってギデンズの問題点（「中心的合成論 central conflation」）の指摘をうけ、時間連関の重要性についての指摘を受けた。彼はそれらの批判を踏まえて、弁証法研究のなかで、時間空間概念を入れ込み、変化と発展、およびそこにおける人間の実践的な形態転換を、不在や否定の概念を導入して、よりいっそう詳しい展開をはかっている。また、意図せざる結果や諸要素の間の空隙などの概念を入れ込んだより複雑な動的な連関を構想しているが、ここでは詳論できない。

⑨ 四面的社会存在 (four-planar social being)

社会生活は、i) 人間と自然との間の相互作用、ii) 対人格的な内部作用または相互作用、iii) 社会関係、iv) 内主観性 (intra-subjectivity) という、相互に依存しあう4つの平面からなっている。社会関係には、力関係、言説関係、規範関係が含まれる。

⑩ 時間・空間の実在性と rhythmic (律動)

バスターは、時制化された空間化過程の実在性を主張する。時空間は、指示的グリッド、尺度、物的事物の体系における変化と差異から抽出された相互排除関係、独自の因果的力を備えた性質、エントロピー的な過程という5つの性質をもつ。バスターによれば、空間と時間と因果性は一体のものである。社会生活の4平面は相互に関連しつつ時空間的な時制をおびた動的過程にある。実在的時空の律動的過程として、過去・現在・未来は実在的なものである。過去は現在に因果的影響を及ぼす。現在は常に発生的契機として実在的である。未来は発生に方向づけられた可能性として実在的である、とされ、時間と空間と因果性が密接に結合され、社会存在論にとって本質的な要素として組み込まれている。

※参考文献

- ・ R.バスター『科学と実在論』(式部信訳、法政大学出版局、2009、*A Realist Theory of Science*, Verso, 1975、Routledge2008)
- ・ R.バスター『自然主義の可能性』(式部信訳、晃洋書房、2006、*The Possibility of*

- Naturalism*, Verso, 1979, Routledge 1998)
- Roy Bhaskar, *Scientific Realism & Human Emancipation*, Verso, 1986, Routledge, 2009.
 - Roy Bhaskar, *Reclaiming Reality*, Verso, 1989, Routledge, 2009
 - R. バスカー『弁証法：自由の脈動』（式部信訳、作品社、2015、Roy Bhaskar, *Dialectic: the Pulse of Freedom*, Verso 1993, Routledge 2008)
 - Roy Bhaskar, *Plato Etc.: The Problem of Philosophy and their Resolution*, Verso 1994, Routledge 2010.
 - Roy Bhaskar with Mervyn Hartwig, *The Formation of Critical Realism: A personal perspective*, Routledge 2010.
 - Roy Bhaskar (ed. Mervyn Hartwig), *Enlightened Common Sense: The Philosophy of Critical Realism*, Routledge, 2016.
 - Mervyn Hartwig, ed., *Dictionary of critical realism*, Routledge, 2007
 - バース・ダナーマーク他著『社会を説明する』（佐藤春吉監訳、ナカニシヤ出版、2015年、Berth Danermark et.al. *Explaining Society: Critical Realism in Social Sciences*, Routledge, 2002)
 - M.S.アーチャー『实在論的社会理論：形態生成論アプローチ』（佐藤春吉訳、青木書店、2007年、M. S. Archer, *Realist Social Theory: the morphogenetic approach*)
 - Andrew Sayer, *Method in Social Science*, Routledge, 1992
 - Andrew Collier, *Critical Realism – An introduction to Roy Bhaskar’s Philosophy*, Verso, 1994
 - M.Archer, Roy Bhaskar, Andrew Collier, Tony Lawson, Alan Norrie (eds.), *Critical Realism – Essential Readings*, Routledge, 1998
 - 佐藤春吉「存在論からの社会科学の刷新—批判的实在論を参照点にして—」（関西唯物論研究会編『唯物論と現代 No.40、20世紀の唯物論』文理閣、2008年）
 - 佐藤春吉「批判的实在論（Critical Realism）と存在論的社会科学の可能性」（唯物論研究協会編『唯物論研究年誌 第17号 <いのち>の危機と対峙する』大月書店、2012年）
 - 佐藤春吉「批判的实在論による社会科学論の基本特徴—バース・ダナーマーク他著『社会を説明する』に準拠して—」（関西唯物論研究会編『唯物論と現代』No.54、文理閣、2015年）